

加納留美子著『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』 ——詩語による自問自答の果てに

原田 愛

はじめに

中国の長い歴史において、宋代は文學・哲學・史學の人文學三分野において集大成が爲された時代であり、主に印刷技術の發展・普及に伴い、それらが傳播する形態・範圍・速度についても社會的・經濟的・技術的に大きな變化が起こった時代でもあった。例えば、文學の「詩」においては、地縁や黨派など様々な緣故による歸屬意識や集團性が強く反映され、また一方で、哲學思想の發展を背景にした俯瞰的な内容と風格が特徴と見なされている。また、唐宋八大家の古文復興に代表されるように、「文章」においても度々變革が起こった。そして、それをまとめた個人の詩文集、即ち「別集」が開封や杭州、福建などの出版業の盛んな地域にて上梓され、國內だけでなく國外にも廣く傳播した。かかる時代背景のもと、殊に蘇軾（字は子瞻、號は東坡居士）の別集は生前から歿後においても盛んに出版され、衆目を集めたと言える。

加納留美子氏の『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』は、その蘇軾が生涯に亘って、もしくは一定期間において、繰り返し用いた特定の詩語や構成等に着目し、その事象を「自作参照」と定め、その文學的特徴と意圖を明らかにするものである。

一、本書の概略

本書は二〇二二年十月に研文出版において出版された、およそ三五〇頁にも及ぶ大作であり、その章立てを目次に沿って列記し、内容の概略を述べる。

序章 蘇軾詩における反復性とその検討

第1章 徐州時代の蘇軾——「自作参照」の視角から

第2章 「人衆者勝天、天定亦勝人」——詩人が託し、詠った「天報論」

第3章 「夜雨對牀」——蘇軾兄弟を繋いだもの

- 第4章 梅花の「魂」——詠梅詩における「自作参照」
- 第5章 蘇軾羅浮山詩考——繰り返された「作法」
- 第6章 海南時代の詩における風景描寫——詩人としての挑戦
- 終章 「自作参照」が齎したもの

本書において加納氏は、蘇軾の官僚人生を四期に分けて整理した。各時期に務めた主な役職や境遇を添えて説明すれば、次のとおりである。

- 修行期 1歳〜20歳 故郷の眉州にて勉學にはげむ
- 第一期 21歳〜44歳 進士及第(21歳) ↓鳳翔府簽判・杭州通判・知密州・知徐州・知湖州 ↓烏臺詩案により投獄
- 第二期 45歳〜49歳 黃州安置(4年) ↓汝州安置(2年)
- 第三期 50歳〜59歳 元祐更化 中書舍人 ↓知杭州・知潁州・知揚州 ↓禮部尚書 ↓知定州
- 第四期 60歳〜66歳 惠州安置(2年) ↓海南島の昌化軍安置(4年) ↓常州に移り半年ほどで死去

本書の章立てと蘇軾の経歴とを照合すると、第1章は第一期の徐州時代の作品を中心に論じ、第2章は第一期の徐州時代から第四期の北歸の作品を対象に論じ、以下、第3章は第一期初期の鳳翔府の時期から第四期惠州時代直前まで、第4章は第二期の黃州時代と第四期の惠州時代、第5章は第四期の惠州時代、第6章は第四期の海南島時代の作品を論じている。各章を通して、蘇軾が生涯に亘つ

て様々な表現・形式による「自作参照」を行っていたことを、加納氏が考察したことが判る。また、これらの各章に出てきた大凡の「自作参照」を以下示す。

- 第1章 徐州…「夜雨對牀」「吾生如寄耳」「人衆者勝天、天定亦勝人(天報論)」
- 第2章 徐州…「人衆者勝天、天定亦勝人(天報論)」
- 第3章 鳳翔〜元祐更化…「夜雨對牀」
- 第4章 黃州・嶺南の流謫…「梅花」
- 第5章 嶺南…「羅浮山」
- 第6章 海南島…風景描寫—「花」「缺月」など

第1章・第2章で取りあげられたのは、主に人生や哲學、そして、政治における思想を表すものである。第3章は蘇軾との交遊のキーワードであり、晩年にも隠居することを約束する言葉でもある。また、第3章・第4章は、「雨」と「梅花」という自然の事物を詠むことによつて、いかに苦境を乗り越えて生きていくかを繰り返し示している。第5章・第6章は、蘇軾晩年の嶺南・海南島時代の創作と處世を論じており、殊に第6章の海南時代が例外的に「自作参照」がほとんど爲されなかった特殊な時代であるという。

これらのうち、「吾生如寄耳」は山本和義氏による有名な論攷があり、蘇軾の「反復性」そのものについても錢鍾書氏、内山精也氏等による論及があり、かかる優れた先行研究については、加納氏もその成果を序章にまとめ、かつ、各章においても適宜言及している。本書は、かかる先達の優れた成果を踏まえながら、蘇軾の「自作参

照」の事例を更に調べて明らかにし、その上で網羅的かつ系統的に蘇軾「自作参照」の様相を明らかにした。加えて、「自作参照」によつて蘇軾の處世観および思想、そして、自然観を、昔から行われた蘇軾の様々な文學研究を改めて見詰め直し、考察している。即ち、加納氏は本書でこれまで蘇軾の文學作品の構成要素として考察されていた、それぞれの蘇軾文學研究や宋代文學研究を有機的に繋ぎ、かつ、系統的にまとめて深化させたのであった。

二、反復する自問自答の集團化

では、蘇軾より以前に「自作参照」のようなことを行つた詩人はいなかったのだろうか。本書ではその問題に對する言及が少なかつたことが氣になつた。^(三) 實際、杜甫や白居易なども、以前用いた詩語を繰り返すこと、過去の自作を想起してまた詩を創作することがあつた。一例として中唐の白居易の「寄殷協律」（『白氏文集』卷五十五）を挙げる。

五歲優遊同過日	五歲 優遊して 同に日を過ぐすも、
一朝消散似浮雲	一朝 消散して 浮雲に似たり。
琴詩酒伴皆拋我	琴詩酒の伴は 皆我を抛ち、
雪月花時最憶君	雪月花の時 最も君を憶ふ。
幾度聽雞歌白日	幾度か雞を聽き 白日を歌ひ、
亦曾騎馬詠紅裙	亦た曾て 馬に騎して 紅裙を詠めり。
吳娘暮雨蕭蕭曲	吳娘の暮雨蕭蕭の曲、

自別江南更不聞 江南に別れてより 更に聞かず。

この詩は大和二年（八二七）、友人の殷協律に寄せた作である。まず、長慶二年（八二二）から寶曆二年（八二六）まで杭州・蘇州の知事として江南に赴任し、そこで殷協律と親交を深めたものの、ある日ちぎれ雲のように離れ離れとなり、以來、大好きな琴・詩・酒も樂しめず、冬の雪のとき、秋の月の頃、春の花の盛りにも殷協律が思い出されるのだという。そして、白居易はその思い出の日々の中で詠んだ自らの詩詞を示す。5句目は「醉歌 示妓人商玲瓏」（『白氏文集』卷十二）、6句目は「代賣新女贈諸妓」（『白氏文集』卷二十七）、7句目は詞の「長相思」という自作からの引用であり、白居易も自注を附している。^(四) また、實は3句目の「琴詩酒」も自作を踏まえた詩語で、以後も何度か詠まれた。^(五) これらを追憶しつつ、江南を離れてからは一度も聞けないと詠んで結び、離別による哀しみの深さを示したのである。

かかる先行の作と蘇軾を比較した場合、白居易にもその傾向が見える共通点として、しばしば近しい友や同志などに示していることが指摘できよう。蘇軾の場合、弟の蘇轍（字は子由）や蘇門四學士（黃庭堅・秦觀・晁補之・張耒）などがその對象となることが多い。そして、明確な相違点は、加納氏も書評シンポジウムの中で指摘されたように、繰り返して行つた「反復性」であろう。その「反復性」は、蘇軾の文學的關心だけでなく精神性を強く反映しており、それを繰り返して問い直し、見詰め直すことこそが彼の文學的特徴であり、眞骨頂であることを教示いただき、とても興味深く思った。ここで、宋代文學の特徴の一つである集團への歸屬意識も一考に

價する問題だと思われる。反復する「自作参照」は、人生の岐路で行われる自問自答でもあり、その答えは本書でも示されるように、蘇軾の心情や状況により變容するものであった。そして、このような「自作参照」を歸屬する集團に示すことは、蘇軾の處世觀や政治や哲學の思想、自然觀などの變遷を共有することでもあった。それに共感したり繼承したり、また、時に批判したり反發したりすることで、蘇軾とその同志たちは集團意識を強化したのではないか。

三、「私」から「公」へ、 そして、「後世」への視點

更に、宋代の「公」と「私」の問題、それに關連する「出版」の問題も考えるべきであろう。蘇軾の「自作参照」と集團における應酬は、「私」の要素が強いものであるが、「出版」によつてそれは「公」の要素も含むようになった。元祐六、七年（一〇九一、九二）頃に蘇軾の『東坡集』四十卷が編纂され、今に傳わっているが、この『東坡集』より前にも、『錢塘集』『超然集』『黃樓集』『眉山集』などの別集が出版されており、それらは現存しないものの、當時、國內外に傳播していた。⁽⁶⁾

そして、蘇軾の別集が廣く傳わると同時に、「烏臺詩案」のような弊害とも言うべき歴史事象が起こったが、蘇軾はそこでも「自作参照」による自問自答を行い、いかにその苦境を受けとめて身を處すべきかを詩に詠み、それを蘇轍に示した。本書第3章で詳しく考察された、「夜雨對牀」詩の一つに、次の作品がある。⁽⁷⁾

聖主如天萬物春	聖主 天の如く萬物春なるに、
小臣愚暗自亡身	小臣 愚暗にして自ら身を亡す。 ^{ほろぼ}
百年未滿先償債	百年 未だ滿たずして先づ債を償ひ、
十口無歸更累人	十口 歸する無くして更に人を累はす。 ^{わずら}
是處青山可埋骨	是る處の青山 骨を埋むべし、
他年夜雨獨傷神	他年の夜雨 獨り神を傷ましむ。
與君世世爲兄弟	君と世世兄弟と爲り、
又結來生未了因	又た來生 未了の因を結ばん。

元豐二年（一〇七九）、知湖州であつた蘇軾が、朝廷誹謗の罪により、七月二十八日捕縛され、八月十八日に御史臺に投獄された。この筆禍事件が「烏臺詩案」であり、その拘束は十二月まで続いた。その間、蘇轍は南京留守簽判として南京應天府におり、蘇軾の家族を保護していたが、死を覺悟した蘇軾は、獄中から蘇轍に寄せたのである。即ち、「天」の如き聖君によつて「萬物」が「春」の頃のように恵みを受けている中、自らの言行によつて身を滅ぼした現状を述べた。それ故に、自分は壽命より早く獄死するために、先立たれた家族を蘇轍に委ねざるを得ず、迷惑をかけることになるだろうと詫びた。それでも自業自得の自分はどこで骨を埋めることになつても良いとするが、残された蘇轍がたった一人で「夜雨」の音を聽いて心を傷めるのではないかと心配した。これは彼らが「自作参照」した「夜雨對牀」を踏まえたものであり、特に二年前に蘇軾が「逍遙堂會宿二首」其二において、離別した後に孤獨に雨を聽く蘇軾を思い遣つたことを踏まえた内容でもある。⁽⁸⁾ また、「未了の因」とは

「夜雨對牀」であり、これが果たされるのは來世で兄弟となったときのことである。その上で、蘇軾は「夜雨對牀」の約束を一人で偲ぶことになるだろう。未來の蘇轍の孤獨を、詩を寄せることで慰め、來世で再び兄弟になるうと呼びかけたのであった。

この詩もまた、『東坡集』に収録されて流傳し、後世の詩人にも大きな影響を與えた。蘇軾以前の詩人には見られない、蘇軾の「自作參照」の「反復性」の背景には、集團意識のみならず、かかる「私」的な營みから出版によって「公」に傳播する意識があったのではないか。

また、この蘇軾詩は日本にも傳わったが、殊に江戸時代末期では「夜雨對牀」ではなく、その前の「是る處の青山骨を埋むべし」に感銘を受ける者が多かったようである。例えば、天保十四年（一八四三）、尊王攘夷派の海防僧として名高い釋月性が大阪に遊學するために郷里を發つた際、「將東遊題壁二首」其一（『清狂遺稿』卷上）において、

男兒立志出鄉關 男兒志を立て 鄉關を出で、
學若無成不復還 學の若し成る無くんば 復た還らず。
埋骨何期墳墓地 骨を埋むるに 何ぞ墳墓の地を期せん、
人間到處有青山 人間 到處る處に青山有り。

と詠んだことは有名である。更に、幕末から明治初期を生き抜いた陽明學者で、備中聖人と稱された山田方谷も「京師寓中作」（『方谷遺稿』卷下）と題する詩にて、

七九殘齡尚壯懷	七九の殘齡 尚ほ壯懷、
觀光半月洛川涯	觀光すること半月 洛川の涯。
被肩白髮三千丈	肩を被ふ白髮 三千丈、
衝面紅塵十二街	面を衝く紅塵 十二街。
混一華夷看世變	華夷を混一して 世變を看、
憲章文武與時乖	文武を憲章とするも 時と乖く。
仰天大笑西歸去	天を仰ぎ大笑して 西に歸去せん、
何處青山骨不埋	何處の青山か 骨埋めざらん。

と詠んだ。これは、慶應三年（一八六七）夏、方谷が六十三歳のときに京都にて詠んだ作で、同年十月十四日に大政奉還が行われた。宋代の出版の發展は、後世の詩人への流傳と繼承を意識すること強く促した。それにより、自らの詩詞の語句が同時代の同志のみならず、後世の詩人も共有していくことを蘇軾も想定したのである⁽²⁾。この「自作參照」が、後世の詩人の詩に典據として詠まれたとくにいかに昇華されたかは新たな問題であり、時に蘇軾が反復しなかつた語句が後世の人々の琴線に觸れ、典據として用いられたというのも、興味深いことであろう。

終わりに

ただ、上記に提起した諸問題については、一定の先行研究の成果が既存するとして、本書ではあまり論及しなかつたのかも知れない。また、本書の趣旨が散漫になるのを避けたためでもあろう。し

かし、加納氏が本書で蘇軾の「自作参照」という視點を見出し、その手段や波及効果などあらゆる視角から系統的に詳しく解明したからこそ、これらの文學史上の諸問題と「自作参照」をどのように関連づけるのか、是非とも知りたく思った。それは本書が蘇軾文學研究だけでなく、あらゆる宋代の文學およびその諸問題への示唆を與えてくれる大著であるからでもある。既に多くの宋代文學研究者の注目を集めているが、より一層の反響を得て、これからも發展していくことを確信している。

《注》

- (一) 山本和義『蘇軾』(筑摩書房、中國詩文選19、一九七三年)解説、後に山本和義『詩人と造物 蘇軾論考』(研文出版、二〇〇二年)に收載。
- (二) 錢鍾書選注『宋詩選注』(中國古典文學讀本叢書、人民文學出版社、一九八五年)、内山精也『蘇軾詩研究——宋代士大夫詩人の構造——』(研文出版、二〇一〇年)等。
- (三) 本書三二頁の注(18)に言及が見える。
- (四) 白居易の自注として、「予在杭州日、有歌云『聽唱黃雞與白日。』又有詩云『著紅騎馬是何人。』江南吳二娘曲詞云『暮雨蕭蕭郎不歸。』とある。また、題自注にも「多紱江南舊遊」とある。白居易「長相思」は黃昇『花菴詞選』卷一に收載されている。
- (五) 「琴詩酒」を三人の友として詠む詩としては、大和八年(八三四)に詠まれた「北窗三友」(『白氏文集』卷六十二)が有名である。また、「吾土」(『白氏文集』卷五十八)に「水竹花前謀活計、琴詩酒裏到家鄉」とあり、また、「詩酒琴人、例多薄命。予酷好三事、雅當此科。而所得已多、爲幸斯甚。偶成狂詠、聊寫愧懷」(『白氏文集』卷六十五)にも、

「愛琴愛酒愛詩客、多賤多窮多苦辛」とある。

- (六) 『錢塘集』は杭州の書肆による出版と思われるが、廣く讀まれていた。烏臺詩案の際、御史臺が蘇軾の罪の證據物件として提出している。また、隣國の遼に『眉山集』が傳わったことを、蘇軾が言明している(蘇軾「北使還論北邊事劄子五道一論北朝所見於朝廷不便事」『欒城集』卷四十二)。拙稿「蘇集源流考」(『中國文學論集』第42集、九州大學中國文學會、二〇一三年)に詳しい。

- (七) 蘇軾「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵。自度不能堪、死獄中、不得一別子由。故作二詩、授獄卒梁成、以遺子由二首」其一(『蘇軾詩集』卷十九)。

- (八) 蘇軾「逍遙堂會宿二首并跋」(『欒城集』卷七)の詩を以下に示す。

逍遙堂後千尋木 逍遙堂後千尋の木、
長送中宵風雨聲 長く中宵 風雨の聲を送る。
誤喜對床尋舊約 誤りて對床を喜び 舊約を尋ぬるも、
不知漂泊在彭城 漂泊して彭城の在るやを知らず。

秋來東閣涼如水 秋東に來たれば閣の涼しきは水の如く、
客去山公醉似泥 客山を去りて公の醉ふこと泥に似たり。

困臥北窗呼不起 北窗に困臥して呼ぶも起きず、
風吹松竹雨淒淒 風は松竹に吹きて雨は淒淒たり。

- (九) 例えば、蘇軾は晩年の「和陶詩」について、しばしば蘇軾や蘇門の門人たちにも和することを求め、また、蘇軾への書簡に「吾前後和其詩凡百數十篇、至其得意、自謂不甚愧淵明。今將集而并錄之、以遺後之君子。子爲我志之」と述べたという(蘇軾「子瞻和陶淵明詩集引」『欒城後集』卷二十一)。

加納留美子著『蘇軾詩論——反復される経験と詩語』——詩語による自問自答の果てに（原田）